

第2回QSOパーティにおいて関東地方で参加した局は約40局、これが50.7~51.6Mcで一斉にOn the airしたため、いやものすごいQRM、特に51Mc付近はビートが絶え間なかったようです。特にアクティブに獲いだ局は次の通りであります。ただし交信局数は未だ不確定。

JA1MP	37局	JA1DI	37局
JA1DS	36局	JA1AN	36局
JA1ID	35局	JA1AI, 1FS	32局
JA1BD, 1GPS	32局	JA1AG	28局
JA1LP	29局	JA2DB	7局
JA2CP	13局	JA3FN	8局

で、A1では東京、神奈川、埼玉、茨城、静岡の5県QSOに成功しました。

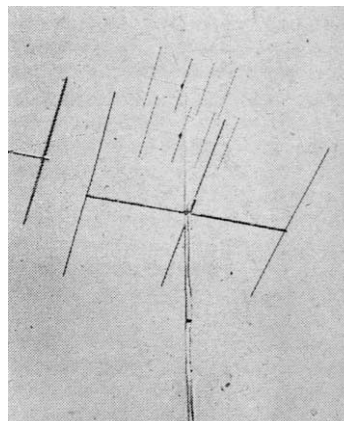
1954.3 014

144 Mc水戸 - 東京間開通

1月24日2100, 144McにおいてJA1OZ(水戸市) - JA1FC(三鷹市)との間にRSレポートの交換が成功しました。これに引き続きJA1CM, JA1DI局もコンタク

トに成功。良好な時はRS58~9+にて通信可能です。

JA1OZ局は予備免許中で144Mcにおいてトントン拍子に運用され、わずかの試験電波の発射により成功したものです。1月14日以来、144Mcの試験電波を発射している水戸市のJA1RX局も1月28日夜、やはりJA1の各局とRSレポートの交換に成功し、ここに完全に水戸 - 東京間144Mc回線が開通、毎晩運用されています。また、現在150Mcのコマーシャル局において



当時の典型的なアンテナの例。JA1TV局の144MHz4エレメント2段スタックおよび50MHzの3エレ八木



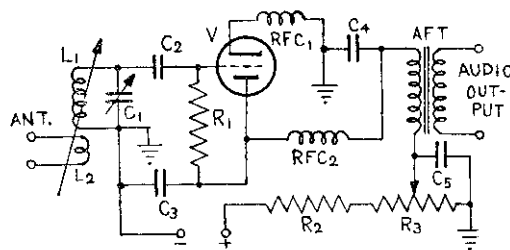
Non Radiate 超再生 (1954年4月号より)

VHF帯の受信にとって超再生受信機は簡単であるにもかかわらず非常に感度が良いものです。一例をあげれば、50Mc, 144Mcの両バンド共東京 - 水戸間110kmの受信に成功、実用になっております。ところが超再生で最も困ることは分離が悪いこと、これはある意味で自業自得であります。もう一つ受信状態にありながら電波を発射することです。すなわち他局に迷惑を与えるので、これはないがしろにできません。

図1はこの妨害をなくするためNon-Radiationの超再生受信回路です。

Non-Radiationと申しまして完全に電波が出ないとはいえませんが、今までのものにくらべて非常に少なくなると考えられます。回路は別にむずかしいこともありません。

RFCをいろいろと変えてみてFBなくエンチングが起るように調整してください。プレート側は2.5mH位のパイ巻きのRFCがあれば、それでよろしい。



- C_1, L_1, L_2 : 50Mc/s 9:7 C_5 : 1 μ F RFC1: 本文参照
 C_2 : 100pF R_1 : 5~10Meg RFC2: 2.5mH
 C_3 : 0.005 μ F R_2 : 30K 2W V: 355, 6C4, 76, 9 ϕ 地
 C_4 : 0.002 μ F R_3 : 20K 可変 AFT: 1対1~3

- L_1 : 内径12mm, 2回巻2mm銅線
 L_2 : 内径12mm, 7回巻2mm銅線
 C_1 : 15PFタイト小型バリコン
 RFC: 30~50回巻 30エナメル線 直径3~5mmいろいろ変えてみる
 AFT: 1: 3低周波トランス

図1 簡単な超再生受信機の回路